

転移

大人の子どもの話である。俗にいう、ピーターパン症候群の話である。

50代の女性が相談に来た。30代で一度結婚したが、数年で離婚した。子どもは授からなかった。事務の仕事やスーパーのレジなど色々な仕事に就いたが、数年で辞め、長続きしない。40代になりアパート生活も大変になり、父親が亡くなったのを機に実家に戻った。長男の弟家族は、隣の市に家を建て住んでいる。40代半ば、いよいよ働くのも嫌になり、なけなしの貯蓄を崩して生活していた。母親はアパートに出て働くように何回となく促したが、社会的自立を拒み、現実逃避を繰り返す。遂に貯蓄が無くなった。父親の遺族年金に頼り始めた。50歳になり、居候し続ける彼女に、母親は突き放すようになっていった。仕方なく就労支援団体に相談に行ったが、すぐに仕事が見つかるわけでもなかった。ハローワークに行っても、自分に合う仕事もなかった。。そこで、県のアイマップのホームページで調べ、私の元に来た。

前述の経緯（実際はもっと詳細だったが、個人が特定されるので割愛する）を聴き、心理テストも採り、少し遠方のため週2日、まずは1か月のカウンセリング計画とその費用を提示した。長い間に身についてしまったものをカウンセリングで変えるので、それを乗り越えるカウンセリングは、それ相当の覚悟と根気があることも説明した。その上で、彼女の今の状態からの改善の求めに応じ、それを実現すべく契約を交わし、カウンセリングを開始した。

ところが、早速彼女は私に自分の親を転移する。私はそれを拒否し、彼女に年相応の冷静な判断を求めるも、彼女は“子どもの心”から脱し切れず、ついていけないと訴えてきた。前述の通り、こうしたカウンセリングでは、こうした彼女の抵抗は想定内のことである。3回目のカウンセリングには、30分も遅刻した。私は彼女の“大人の心”に呼びかけ、その解決の糸口を掴むべくカウンセリングを続けたが、彼女はそれが理解できないほど“子どもの心”のまま。次回も1時間も待たされてカウンセリングしたが、状態は変わらずだった。それ故、彼女の申し出により、カウンセリングを中断した。彼女は他に助けを求め、そこから費用の話が出てきた。そうすると信頼関係もなくなる。私のカウンセリングを理解されず、私も限界を感じ、私のこれまで行ってきたカウンセリングの対価も求めず、初めて私から契約を解除させて頂いた。まさに「転移」を体験した。

「焦る」は、自分が何とかしなければいけない時、自分の行為の遅さや出来なさにいら立つ状態と言う。まさにひきこもりの子を持つ親と、そのひきこもりの子の状態のように思う。カウンセラーはA（大人の心）でもって、冷静にC（子どもの心）になっているクライアントのAに働きかけ、どうすべきかクライアントから答えを引き出させる。それを基本にカウンセリングをするが、クライアントは焦り、カウンセリングの中止を求めてくる。なかなかCから抜け出せず、抵抗する。覚悟と根気でそれを乗り越えてこそ、カウンセリングが成功する。